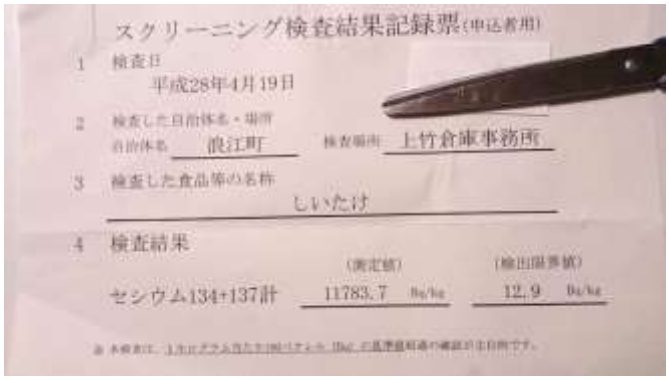
浪江町住民の一報告

2016.5.14　菅野みずえ

原発事故当時、2011 年３月 11 日から 15 日まで浪江町が一斉非難を町民に伝える日まで、津島地区の自宅に居ました。これは浪江町の地図です。国は輪切りに半径 5km、10km と単純に避難を告げましたが、実際はそんなものではありません。単純な避難基準はそこに一切気象条件は省かれ、風も雨も無い事にしてあります。実際の暮らしにありえない事でしょう。福井の原発の避難路も同じ発想です。福島事故があったのに、まだみなさんはいつでもわたしになる暮らしを送っているのです。

ご存知の通り、浪江町は町役場が事故原発まで直線距離６km に位置しながらも、国からも県からも直接原発事故を伝えられることはなく、独自の判断で事故原発よりより遠くへと、わたし達の津島地区へ全町避難を決めました。
12 日の夕方には汚染地域であることを後にも先にも見たことの無い防護服を着た男たちから知らされていました。家には友人夫妻、親戚、親戚の友人家族、その友人の隣人が避難してきており､その人たちにはより安全な所へと逃げてもらいましたが､家族は地域の消防団に属し、避難してくる人たちの炊き出しを担当していました。それで全町避難まで逃げないと決めて残っていました。危険を解っていないわけではなく、隣人や、親戚、町へと避難を呼びかけていました。一方で不確かな防護服の男の情報だけで動けないという町職員の判断も理解していました。あの時、男たちからデーターを貰わなかった後悔が、今残せる資料は自ら残さないと、誰も本当のことは言わないのだと身体に沁みついて思っています。

今年の４月、もう椎茸が出ている頃だ、今行かないと採取できないと、甲状腺癌の手術後３週間目に一人で福島へ向かいました。原木に菌を入れて６年目です。もうそろそろ原木の限界が来ます。どうしても採取しなければなりませんでした。椎茸のセシウムの値は写真のとおり 11,783.7Bq/kg です。参考までに 2012 年 12 月に採取した椎茸はセシウム合算で **36,200** Bq/kg、なめ茸は **57,300** Bq/kg ありました。心配ない、食べても大丈夫と言う方々に佃煮にしてお配り


スクリーニング検査結果記録票(申込者用)
1 検査日
平成28年4月19日
2 検査した自治体名・場所
自治体名 浪江町　検査場所 上竹倉庫事務所
3 検査した食品等の名称
しいたけ
4 検査結果
(測定値)　(検出限界値)
セシウム134+137計 11783.7 Bq/kg　12.9 Bq/kg

したい思いでした。

電気は来ているけれど、電話回線が寸断され光ケーブルだった我が家は電話もパソコンも使えず、15 日早朝ガラ携で見られる不十分な情報を持って、町職員に掛け合いに行ったわたしは、全町退避する。8 時の時点で全町避難。10 時までに完了と聞かされました。町も雨に不安を持っていたのです。自治会からも連絡が来て、炊き出しに出ていた家族も賞味期限切れのおにぎりを沢山持たされて、戻ってきました。それからもう生きている間には戻れないと家の整理をしている時雨が雪に変わりました。町を出たのが午後を廻っていました。もう車はみかけませんでした。

あの時避難を受け入れてもらうにはスクリーニングの証明書が必要でした。
関西へ逃げる途中の郡山を目指し、車のラジオから流れる切れ切れの情報から郡山総合体育館に着きました。しかし駐車場に空きがなく、家族は駐車場待ち、わたしは先に並んで検査の順番待ちをしました。並んで検査まで 3 時間を要しました。福井の原発からの避難計画がいかに机上の物であるか身に沁みて分ります。

郡山にも雨が降り出し本降りになってきましたが、車まで取に行けば長く並んだ順番から外れてしまうと、家族が傘を持ってくるのを待って並んでいました。子どもの頃水爆実験などから、雨に当るなと学校でも親にも言われ続けていたのに、あの時何故怖がらなかったのだろうと思うのですが、学生時代から原発反対のデモの中に居たのに、放射性物質の飛散について真剣に学んではいなかったのだとしか言えません。冷静に考えることが出来ていなかったと、一連の行動を振り返って思います。本当に国家権力は簡単に国民を見棄てるのだという実感だけは強く感じていました。国から見棄てられた、という実感にただ強く打ちのめされていました。此れだけの人を、これだけの生き物を国家は簡単に見棄てるのだ、今までの福祉を通じての生存権を守るわたしの生き方はなんて無意味だったのかとさえ思っていました。腹も立っていました。言いようのない気持ちでした。あの頃を思い出すと今でさえ得体のしれない不安感に襲われます。
だから、今取り返したい。誰かがわたしにならないために。

ガイガーカウンターは 13 日までの 1 万ＣＰＭの検査限界値では追い付かないと 14 日から 10 万ＣＰＭに引き上げていました。その針が振り切れたのです（ＣＰＭは 1 分間の放射線カウント数）。
この時、国は名簿を作れと指示していたはずです。そうしなければならないのですから。しかし県は名簿作成を指示していなかった。この日 10 万ＣＰＭを越えた県民は公式には５人とカウントされています。その中にわたしは入っていません。名前も聞かれていないのです。何処から来たかを問われ「津島」と答えただけです。あのときの最低 10 万ＣＰＭを超す被曝を証明するデーターは何もありません。
「また津島！」と叫ぶほどの人数のガイガーカウンターが振り切れていたのに資料が無いのです。

2015 年２月に福島市で受診し甲状腺エコーを受けて 10㎜ののう胞があるが年齢的に誰にでもありうる、過剰に被曝を心配することは無いと診断されました。県外へ避難して１年目の今年２月に健診で異常を伝えられ紹介された専門病院で、あっさり「癌ですね。悪性かどうか細

胞診しましょう」と告げられて１週間後、「残念ながら悪性の癌です。直ぐに手術すれば問題ない」と、とんとんと１か月半後には手術切除に至りました。10 年後の生存率は普通の人より少し少ない程度と。

手術痕は小さく８㎝ 程度。術後の痛みや異変も無く傷が少し攣る程度で変声もありません。10 代の女子の中に手術跡をからかわれ、登校できなくなったという様な、術後痛くて食事が出来ず痩せてしまったという様な福島の子どもたちの報告と大きく違います。福島の子どもたちが受ける医療の質が、此処とは違っているのではないかと想像して辛いです。

しかし、わたしが体験した様に、事故を矮小化させようとするあまりに、健康被害を無かった事にしようとしている、県民の健康不安を「過剰な被曝不安をしないことが大切」と医師会が率先して指導しては居ないかと不安に思っています。

散々痛めつけられた県民の健康を守って欲しいと切に願います。特にこれからの時代を担っていくまさに国富としての若い世代が、この時代に福島に生まれたというだけで、不当に健康が奪われることがあってはなりません。十分な先進医療と熟練した医療技術が子どもたちに与えられなければなりません。その運動はわたし達大人世代がしなければならないことなのです。

福島県は、長い冬場の野菜不足から保存食が多く、塩分の多いもので米飯をたくさん食べると言う食生活から生活習慣病が多い傾向がありました。そのためか一般内科の医療機関は多いけれど専門医が少ない状況がこれまで続いていたように思われます。この事故以来周囲では様々に病気の人を見るようになりましたし、受診率も高くなっています。わたしの住んでいたわずか 180 世帯の仮設でも、皮膚がん、肺がん、甲状腺疾患の悪化、突然死、呼吸器疾患の悪化、生活の変化からの生活習慣病の悪化、新たな発症、不眠不安の訴えの増加を顕著に感じ取っていました。

事故以前との比較が大切ですがそもそも健康診断の受診率が低かったということもあり、比べることは難しいと浪江町の担当者からの返答でした。

これからどのような病気が増え悪化したかの調査は必要ではないか、住民はこれまでの経過から県を信用できず、健康アンケートが不本意に集約活用されるのではないかという不信から応えていない人が多いように思われる中、町独自の調査をしてほしいという願いは出してあります。

突然何の落ち度もなく、自然災害でもなく家や町から一斉に追われることの理不尽ささは言いようもありません。ずっとそこに住み原野を田や畑へと耕してきた先祖の人々の費やした時間までを無いものにしてしまいました。都会の方々に伝わるかどうか心もとないのですが、田や畑と言う土地が最初からあったのではなく、農民が代々手を入れ耕し続けて肥沃な土へと変化させてきたのです。それを原発事故はたった２年で無かった事にしてしまいました。最初はセイダカアワダチソウで覆われ今は柳の林となり、猪の住処となっています。其処に繋がる人間関係全てをバラバラにされてしまいました。一緒に暮らして居た家族を、夕方野良で缶ビールを空けあった隣人を、一緒に時間を過ぎしてきた友人を引き離し、培ってきたそれまでの財産を奪ってしまいました。

全て言わなくても共有できる時間を持って来たものが分る関係を、さよならも言えないで突然失くしてしまったことの喪失感。５年もの間の辛い時間を共に傍で励まし合うことなくバラバラに過ごしたことの悔しさ。自治会の成り手が無く解散など考えられない暮らしの中で、助け合うことなしには成り立たない地域生活を送って

来た者が、全くばらばらになる空虚な気持ち。避難して人間関係のないところにぽつんと一人でいるような心もとなさ、黙っていても泣けてしまうような寂寥感。

でも、だからと言って避難は間違いではありません。この辛さは放射線の影響より大きいとは思っていません。

原発事故は誰も責任を取らない、なぜそうなったかの説明責任をだれも果たさない、勝手にもう大丈夫だから還れと告げられ、追われたのに、還らない者はもう個人責任だと決めつけられる。病気など成るはずがないと言われるその理不尽さのどうか当事者にならないでください。今ならまだ間に合います。

写真で見ていただくように、わたしの町への道は閉ざされています。バリケードでの封鎖ではなく道に鍵がかかる。その異常さを国は早くもなかった事にしようとしています。家の周り 80mの除染を１度すれば２回目はしない、還って行けるというのです。

双葉郡の自治体の帰還解除が急激に進んでいます。2014 年の 12 月非公式ながら、国の担当者がわたし達の地域住民説明会で、普通に戻るのはいつだと詰め寄られ 27 年後と答えました。しかしオリンピック前に全ての地域が帰還解除となるとニュースは告げています。

自主避難の人々を家賃補助を切ることで県内に戻そうとする福島県。非常事態宣言の出ている原発のある福島県へ被曝基準を引き上げて帰れというのです。

国の放射線管理区域は年間積算５mSv を被ばく限度とされているのにもかかわらず、福島県は既に汚れてしまったから年間積算被曝 20mSv で良いと国は言います。他府県では被曝防護にレントゲン室で鉛の防護服を着るのに、福島県民はレントゲン室の中で生活をして構わないと言うのです。赤ちゃんに授乳しハイハイさせ、おむつ替えしても何ら問題は無いということです。風呂にだって入って構わないのです。あり得ない！

此処まで来ても公然とした棄民政策を何ら恥じない国と、それを受け入れ積極的に事故を無かった事にする県。

此れだけ地震が起きても川内原発を止めない国。国民の受けた被害を無視するから出来る事。認めないから知らない顔して動かすのだろうと思います。

いつでも、同じように棄てられたのは国民の健康な普通の暮らしと権利。そして故郷。掘り起こせば国中にその残骸が見つけられる。だからこそ、被害を知る者は声を限りに伝えなければならないのです。

たくさんの被害者の声を聞いてください。

防げる不幸はあるのです。

間に合うときにきちんと行動し、声を揚げ自らの力で止める以外、道はありません。国は守ってはくれないのです。

その経験をお伝えさせていただきました。どうぞ受け止めてご一緒に行動をお願いします。

ありがとうございました。